

# 哲学の現実態序説

——『饗宴』研究——（その三十一）

伊集院 利 明

## 第六章 夢中説夢（続き）（この章はこの回で終わる）

### 34 とりまとめ 第一段階 基礎考察

転の思想をとりまとめ、これまでの本章を本格的にとりまとめる作業を、ほぼ第32節に示した手順に従って遂行しよう。本節では、転や他性についての決定的な経験というものがないということを論じてから、ここまで論じた、統持の世界における拡張、小・大・小運動関係、逆転認知の合体等の様々な事柄の間の諸関係を暫定的に整理することで、統持の転の経験の一般性の意義を明らかにし、転の安定性についての本格的考察のための下準備となる要因を整理する。暫定的、下準備と記したように、諸要因の連関の意義をほりさげるためには次節でのより踏み込んだ考察が必要となり、それにより転（と過ち）の実態はようやくその全貌に近い像が描かれることになる。本論は、転に関してのみでなく他性や全体性に関しても、さらには過ち自体に関しても特権的、決定的な経験などないのだという立場から、そういったものについて、様々な事象、事柄、項目の間に分け入って、それらを、そして、それらの相互関係を感じ得し、理解し、それらの中で生きていくことこそが問題であると、転、他性、全体性の理解自体についても、様々な項目のうちに、そしてそれらの相互関係のうちに遂行していく方針をとる。

一一六

決定的な経験というものがないことについて。ないとする決定的な論拠はなくとも、あると考えるのがきわめて不合理であるという有力な根拠をいくつか提示することができる。

第一の最も重要な根拠は、小 - 大 - 小運動の叙述のうちに下描きされている。過ちの転にしても、他性にしても、また過ち自体にしてもそのもととなる本質的核心をしめているのは、出会われるものの偶然性、不可測性等の威力である。これは、小文字的なものの小文字性の威力とも言える。そうした性格に満ちた出会われるものの場に踏み出していること、焦点を結ばない大地に既に踏み出してしまっていること、血肉をもって踏み出すその踏み出しにおいて私が自己を決めてしまっていること、そのことのうちに、過ちは生起するのだが、その力がまた、転を裏付けている。ものの偶然性の、この力は、小文字 - 大文字 - 小文字運動の主要因となる力でもある。小文字の世界に安定性はない。垂直軸の統一性は平面性の問題場に置きいれられて揺らぐ。こうした事情が過ちの、転の構造を形作っている。そこには絶対的安定や決定的なものはない。これが生の構造である。決定力を持って一挙にすべてを平定してしまう力をなにもものもたない。偶然性の威力をそぐことなしに偶然性の力自体がもたらす揺らぎを除くことは不可能であり、こうした事情は小 - 大 - 小運動のうちに如実に反映されている。

第二の論拠としては、かなり有力と思えるような候補すらもが失格してしまうことがあげられる。それ以上に有力なものが見出しにくいと思えるようなものが失格することは、見出されるものなどないということの決定的な論拠ではなくとも、強力な判断材料になる。有力候補は三つあるが、正確に言うとそのうちの二つはすでに失格してしまっている。第一は死。死は生の全体性、限定性、個別性に関して特権性を持ったものの候補としてしばしば挙げられてきたもの、ときには生の最大の核心的問題として挙げられてきたものであり<sup>(1)</sup>、そして実際にかんがりの卓

抜性があることを本論も確認してきた。しかし死に卓抜性はあっても特権性がないということこそが本論が論じてきたところのものである。もう一つ言えば、死には忘却が伴う。忘却を介しての打撃の勢位の高まりの現象はたしかに力を持つが、勢位の高まりの感得も忘却とともに、世界の様々な日常的なものと生きることとそのこと自体の重みと混交した形でなされる。死の決定力は否定されざるを得ない。第二は他ならぬ統持である。統持が生全体に関わる卓抜なものであることを本論は第三章の段階から執拗に追求してきた（統持の必要性が主張されたわけではないが、統持があり得ることの必要性は強く主張されてきた）。過ちの転と統持との連関もそのことの反映に他ならない。しかしさんざん考察してきたように、統持は対成立の事情を抱え転落の可能性、不安定性に付きまといられる。そのこと自体が転の基盤となるにせよ、それは不安定さの半面であり、これは、小・大・小運動の経験の変転性ともなってあらわれる。第三の有力候補は、たったいま述べた小・大・小運動の経験自体である。実際のところ、私自身として個別的経験として切り離して見ることができるとするならば、この経験こそが最も重要な経験であると思っている。決定的なものが希求されながらそれが打ち破られ決定的なものなどないのだとつきつけられる経験である。偶然性の問題自体、遇の重み自体を問題とし、それらのものの不安定さに立ち向かうこと自体が打ちすえられるという点で、これは卓抜性を持ったハンマーの打撃である<sup>(2)</sup>。この打撃は解決の境地を夢見ることへと強く誘った上でのものであるだけに強力さを持つ。しかし、これは決定的経験を求めることに対する回答としては明らかにきわめて反語的なものでしかない。さらに、先に論じたように小・大・小運動は1ラウンドで終わるような性格のものではない。私が常に小文字の世界に置かれ水平面上の齟齬の場に置かれることこそがこの運動を引き起こしているのだから、そうした恒常性はこの運動に言わば本質的に含まれている。つまり、この運動は

もともとそれ自体の決定性を否定するような性格をその本質としているのだ。 - - こうしてきわめて有力に見える三候補が脱落する(した)。

第三の論拠は第一の論拠を別の角度から解明し直したのとも言える。それは、どのような経験、ものに対しても我々は理解をし、それによって何らかの態度をとるということである。水平面上に出会われるどのようなものに対しても理解をし垂直的運動が水平面と一定の関係を持ちそこで様々な齟齬の可能性につきまといわれるということこそが、本章が追求してきた問題性である。いきなり決定的なものや全くの異的、他的なものが私に立ち現れるわけではない。それらは何らかの私の構えに対して現れる他的なものである。同様に、どのような経験、他的なものとの邂逅に対しても私は自分との何らかの関連づけ、態度とりを行う。だから、水平面上で起きるどのような大きなことも理解され垂直軸の運動に吸収され、それがまた水平面での新たな打撃の可能性を切り開いていく。その意味で底と思っているうちは底ではない<sup>(3)</sup>。いきなりとてつもないものに出会って話が終わるということはない。予想しなければ予想できないようなものに出会うこともあり得ない。すべては我々の態度との関係とともにある。決定的なものなどなく、我々は二つの軸の関係にまきこまれ、そしてさらには小 - 大 - 小運動にまきこまれる。

以上の第一、第三の点は、他性の経験を考える上でもきわめて重要であり、そのことはここで注目しておくべきであると思われる。限界性、他性というものは、私自身のあり方と様々なものとの私にとっての関係において与えられ、私自身に見通せず不可測であること、さらに私自身の不可測性、見通し難さにおいて与えられる。つまり、限定性、他性というものは、ものとの間の関係性であり、それ自体がものとの、つまり、具体的で偶然的なものとの他的、限界的な関係においてあり、それにおいて与えられ理解されるものである。このことからすれば、次のように言えるはずである。限界性、他性自体が生の中で理解されざるを得ず、

ものとの関係において制約づけられて理解されざるを得ない。その意味で、限定性、他性自体ももの的に制約されて与えられる。もっと言えば、限界も限界的に与えられ、他性も他的に与えられる。 - - これは決して奇異なことではなく、ものとのかかわりの重み、ものものとしての力を重んじる視点からすればきわめて自然なことである。

決定的なものがない中で、様々な多数の経験を重視し、その中に見られる諸相を重視し展開していく。そのためにまずこれまでに論じた様々な事柄、諸相の連関とその意味を整理しておこう。とりあえずの構造連関の整理は比較的容易である。小 - 大 - 小運動が様々な形で世界に拡散していること、そして第28節で論じた統持的なものあるいはその萌芽的なものが様々な出会いに見られ、その意味で統持自体がやはり拡散しており、その中で統持が中心的に位置づけられること、この二つは同様の拡散現象として相まって統持的なものと小文字的な力との連関が世界に幅広くあることを示す。そして両者の連結におけるそうした拡散の背景となるものとして第33節で論じた諸経験の存在があり、それによって論は現象的支えを得る。もちろん両者はたんなる連繋関係だけでなく共通の根によっている。小文字的なもの、偶然性の世界のうちのものが力を持つのであり、そうしたものに規定されることに出会いの重みがある。そして様々な形で様々な深淺の程度を持った、世界、生についての感得が様々な微妙な適合をものとの間にもつことにおいて、ものの重みが生まれるのであり、そうした形で位置を占める様々な偶然的な出会いの力が小 - 大 - 小運動を成り立たしめ、その力が統持的なものがあり得ることこそが出会いの重みを成り立たしめることの感得への動向を形作っていく。統持的なものの重み、統持的な転が様々な形で世界に拡散していることが現象的裏付けとともに明確化された。

こうした一般化の考察によって、先に逆転認知の合体と名付けたものも一般化が図られたことになる。転についての根本的な視点獲得が形成

される中で、この生の中における幅広い形で起こる各種の齟齬は、垂直軸の運動を賦活化、先鋭化させるものとなるし、また齟齬自体の中に世界と自分との関係を感じ得る動向が生まれることが根本的な視点、感得の形成となっていく。齟齬が身を削るものとして苦につながるものである以上、苦の中にこそ生があるという実感の正当化もこれにより一般化され裏付けられたことになる。また鷗外型の恐れが統持との合体により抽象性を脱していくことを論じたことも、拡散、一般化されるのは当然のことである。 - - こうした一般化のうえでも、小 - 大 - 小論を経たうえでも統持の中心性の論は揺るがないはずであり、小 - 大 - 小論自体が小文字的な具体的なものの威力をさらに顕在化させる以上、それにより、いま述べたような要因がものとの関係における具体性、実質性をさらに増幅させることも言える。それゆえこうした展開事情の中で、鷗外型のおそれはものとかかわりにおいて抽象性をさらに脱しその本来の力を発現する。また、逆転認知の合体にしても、垂直軸と水平軸との関係が問題でも、水平面のものがそれとして私に問題になるということが重みを持ったうえでの合体であるがゆえに、水平面での様々な齟齬がそのまま垂直軸の問題性の深みを、具体的な実感として感得させる。我々は平面にある世界の深みに言わば思考の立ち止りぬきに直接に感応する。だからここでは世界自体が驚きに満ちたもの（でありかつ色褪せたもの）になる。

こうして、統持の一般性、通常の出会いと連続性運動性、そして小 - 大 - 小関係、そして前節の諸経験が、運動して統持の一般化への道と転の一般性を形成し、転の主張は一般性の点で弱さを克服する。とりあえず整理される連関を明確化、敷衍しよう。 - - 統持の対成立構造から蒸発をはらむこととそれへの対応、大 - 小関係の構造、そして、逆転認知の合体が一般化されること、これらの運動において様々な場面の小文字的なものに全体の構造を感じ得ることが成立することになる。様々な

大 - 小関係との連動で、小文字の突きつけが様々な局面で問題になることにおいて、蒸発の問題性もつきつけられることになり、そこにおける様々な齟齬が、蒸発性と連動する垂直 - 水平の関係の構造と連なることで、逆転認知の合体において、世界への根づきの運動性を形作っていく動向が生まれる。そしてこれはまた鷗外型のおそれの一般化と名付けられたものと連動し、私の俯瞰的な見方自体が限られていること、限られていることに対処するあり方自体が限られていることから、限定性、この場にいる自分の生が自分にとっての全体であることが突きつけられ、そうした他全性のもたらず脱力性と、そこがまさに生であることの感得においてあきらめ的なものと肯定的感得との連動、相互移行の中で深みを与えられることになる肯定感が生まれ得る。

これによって、転の安定性、過ち（と転）の思考の意義が十分に解明されたと言えるであろうか。 - - 本章後半部中間決算の段階からの進展の大きさをよりあきらかにするためには、連関構造の内容についてのより踏み込んだ解明が必要である。しかし、次節でそれを行う前に、小文字的なもののもつ変転の力に対しての転の安定性、肯定の安定性の保証の問題を考えるための下地になる材料のうちより現象的な諸要因をごく簡単に整理しておこう。そのための下地はすでに下描きされていると言える。

第一に、こうした（そしてこれに続く）論による理解というもの自体が、それなりの安定性をもたらず。過ちなしに、否定性なしに、肯定性はないこと、苦の中に充実があり得ること、世界に統持の運動性が満ちていること、死に際してのみならず様々な巡回性の打撃の中に世界の深みがあること等々、ようするに本章で扱ってきたすべての事柄及び扱いきれなかったことの諸々の理解がそれに当たる。理解がそれ自体で決定力になるわけではないにせよ、言語的に定式されることにおいて、安定化に対して限定されたものであるとは言えやはり一定程度の力を発揮す

ることは否定できない。

第二に様々な気分は何らかの分裂性を抱えた気分であっても、それなりの統一性をもたらし得る。例えば、双極的気分や巡回性、打ちのめしの気分である。第24節でそれらが世界的なものごととの日常的なかかわりとともに、それなりの同質性を持つことを論じたが、それは考察を経てより一般化された次元、またやや次元の高まった段階においてもかわることはない。予測のつかなさに対して構えをとると言い方も、前に述べたように決して空語にはならない。

第三には哲学による気分の先鋭化がある。漠然とした倦怠的気分には不可避性があるにせよ、考察はその根を突きつけることにおいてそれを世界についてのより先鋭化された気分にもたらしすることができる。気分の先鋭化は深みの開示であり、これはここまでの二項と連動することにより、安定化の基盤となり得る。（第一、第三の点は、これまでにも何回かふれた哲学の世界介入性、言語行為性にかかわっている。）

以上の三点についての考察を簡略にすませたのは、一つに説得力の点で、それで十分であろうと思われたからであるが、もう一つには、これらの現象的ポイントに有効性があるためにも、上に論じた根本的諸要因のより深い次元での関連性の解明が重要であると思われたからである。それをもっと追及しよう。統持形成論の後の諸論がもたらした成果をもっとはつきりさせねばならない。

### 35 とりまとめ 第二段階 鏡玉性と破碎 無の天文学にむけて

諸項目の連関を内容的により掘り下げるために、先に提起した鏡玉性の概念を中心軸として解明していきたい。中心軸とすると言っても、鏡玉性が連関構造の決定的中心をしめるというわけでは決してない。それはその比較的、あるいはどちらかと言うと中心的な役割を果たしていると言うにすぎず、それを軸として論を進めるのはあくまでも当該の論述



の展開の中での説明の都合上のことにすぎない。

まず、鏡玉性の明確化について。ここ、あるいはこれが、ここにあることにおいて全体を映すという言い方はやや誤解を招きやすい。どのような小宇宙も何らかの大宇宙を反映する。あるものができたのは、全体の運動の帰結であるし、ものの性質には当然全体の構造が反映されている。ここで論じるのはそのようなことではない。むしろある意味この鏡は全体を映さないのであり、まさにそのような限定性においてこそ、ある種の全体性の顕現がある。一つのもものが一つのものとして重要である。それとのかかわりにおいて生は限定され、視界も限定される。そのような限定性、個別性において、個的な場での偶然性を生きるという生のあり方の全体性が顕現、あるいは彰現する。これが、瓦が瓦であるままに全体を映す鏡となるということ、一つのもものが一つのものにすぎないというまさにそのことにおいて全体性があるということ、ものが、映すものとしてではなくものとして重要であるがゆえに映すものであるということである。

もちろん、これは特にこの段階での目新しい提起ではない。その内容は統持形成論、特に根づきの論述のうちすでに展開されている。生の限界性ととも根づきがあること、生の根本的感得があることが、確認された。ものがものであることとものへの我々のかかわりにともなう諸事情が、水平軸と垂直軸の関係の問題を起し、そうした過ちの問題状況が、統持における対成立構造を成り立たしめていた。ここでは、ものの個別性、限界性が、生の全体性への展開と相即しているのであり、それが転、対成立の構造の骨格をなしていた。--このように鏡玉性としていま述べていることの要件はその段階で基本的には出そろっている。それでも、ここで注意したいのは、対成立、根付きについての論述から後の第27～31節の論述展開が、もの性と全体性との対峙と関連とにともに先鋭化、明確化をもたらしていることである。

その間にもたらされたのは、対峙の先鋭化だけではなく、全体性が、世界の全体性、生のより広い範囲の全体性として関連付けられる事情である。（先取りして言うと）このようにして世界関連性ととも当事者の能動的運動性、それと重ねあわせられる統持の世界へのある種の運動性、先に問題にした他性、あるいは、他の他性、そして鵑外型の恐れ、逆転認知の合体、こうしたことが、それぞれ先鋭化を受け、それらの間の運動の深みがより明らかになる、そしてそうしたことのうちに、転の全体像と過ちの考察の意義のより明確な像が、浮かび上がってくることになる（そのことをこれから示していく）。

まず、統持のもの性が先鋭化される。もともと統持は徹底的にも的的なものである。しかし、小・大・小論のところでも示したように統持はそれ自体のうちに小・大・小運動を含んでおり、大文字化への動向を含んだある種の大文字性の性格を併せもっている。統持という概念のもつ理屈っぽさは軽視できない。自分の生全体を問題にする思考性はものの見方に理論負荷を与えつねにその視界でものが見られることは理念化への傾向を誘う。私は常に大文字の希求へといざなわれ、その現実性および小文字的次元の超克の幻想へと誘われる。こうした理念性が小・大・小運動により払拭される。大文字的なものが希求されながら常に小文字的次元へと引き落とされることにおいて、統持の小文字性が顕現、先鋭化し、統持が小文字的なものとしてはじめて力を持つことが先鋭化させられる。しかもこれは、第28節で論じた世界の諸々のもの、諸々の出会いの中における、統持の位置づけ、統持の中心性と、そのこと自体の感得の要請により、統持を他の様々なものとならぶ小文字的なものとして、つまりごくふつうのもののようなもの的なものとしてとらえることが要請されることで強められる。「払拭」という言い方をしたが、これは（もちろん）言いすぎである。小・大・小運動が1ラウンドで終わるものではなく、我々が常に大文字化への動向に誘われることは論じたと

おりである。それでも小文字性のつきつけ自体が確固とした現実的実感  
をになったものであることには変わりはない。さらには巡回性自体も一つ  
の限定性であり、その実感の小文字性のつきつけと重ね合わせて感得さ  
れ得るという面を持っている。

統持という一個のものに生の全体性が映されることにおける対峙の両  
項のもう一方の側（右項）について。統持が生全体の性に関わるにせよ、  
それは出会いという局面において感得されることを軸として実効化され  
るのであり、そこには視野の局面性が付きまとう。第27～31節の論がこ  
れを「払拭」することはすでにこの段階でほぼ明らかなことと言える。  
様々な出会い、ものごととの関係のうちに置かれることで、統持は生に  
おける様々な可能なできごととの関連性の相に置かれ、それらが統持性  
を介することとそれらをとらえる目が要請れることで、さらには同様な  
形で、統持が価値の「生成」というきわめて広く重要な場に位置づけら  
れることで、我々は生活の中の様々なものごとを統持的相のもとでない  
しはそれとの運動の中で感得することを要請される。こうして統持は生  
のより広い全体的問題相の顕現との対峙におかれることになる。

ものとしてのものと、全体性との対置の両項の先鋭化が描かれたわけ  
だが、これはもちろん、平面的な対置ではないが、単なる両項の間の関  
係の先鋭化にとどまるものでもない。焦点となるのはむしろ我々をまき  
こんだ動性である。統持形成論などにおいて論じたように、我々は一つ  
のものへと態度をとり、それへと入り込む限界性の方向へと向かい、そ  
のことにおいて全体性を感得する。この限定性への動性が先鋭化され、  
大文字性の脱色化が方向づけられ、これが小・大・小運動の連続性、相  
続性、世界内の諸々のできごととの連動性（そしてそれにおける生その  
ものの運動性との連携）などとあいまった、限定性、他性の運動性とし  
て深められ、そうした力動性のなかではじめて我々に全体性がひらかれ  
る。あたかも徹底的に左に向かうことによってはじめて右がひらかれる

かのように、全体性が、限定性、他性との対峙的な力動性においてはじめてひらかれる。この力動性が、ものが徹底的にあくまでもものとして重要であることにおいて、それと対峙される全体性があることとしてとらえられる。かくして、全体性はきわめて卓抜した形で、限定性、他性においてあり、他性はそうした力動性として、全体をひらくものとして、生きられることになる。

こうした力動性のあり方、内実をさらに明らかにするためには、転にまつわる様々な諸項目の間の関連付けを深化させ、それらの有機的関連性において成り立つ全体像が描かれねばならない。しかしそれにとりかかるまえに、まず三つほどの注記的補足を与えておきたい。注記と言ってもいずれも重要なものであり、特に第二、三の点は重要度が高い。一つは接合のあり方、二つ目は接合の両項のうちの、右項にとっての左項の必要性、三つ目は「鏡玉の破碎」という観点である。

一つ目として、ものとしてのものと全体性との接合における接合の asyndeton 性に注目しておきたい。もちろん両者をつなぐ原理（という接続）があつての接合である。しかし、全体性はものとしてのものに直接的に観取されることが要請されるし、現実的にそのように観取される。ものであるにもかかわらず映すものであるから貴重である、と言うのではなく、むしろものがあくまでもものとして（限定性、他性の先鋭化をともなつて）重みを持つゆえに映すのであり、ものそのまま鏡なのである。そしてこの接合の「強引さ」とらえられる運動性が、他性の力動性の一角をなしていく。

二つ目は「他性の力動性」という言い方の正当性にも関連している。それは、接合において、左項への運動は右項をきりひらくものであるという以上に、右項のひらきのために、そもそもこうした接合と、左項へのそうした運動が必要であるということの明確化である。ここで書くべきなのは論というよりは文字通り明確化である。我々は世界に生き、も

のとのかわりを生きる。それを欠いたものは全体性にはならない。そしてそのかわりは生の部分なのではない。我々が限定されたものの場合へと一定の形で踏み出し、そこで、個別的なもの、場の限定性、他者性、予測不可測性（さらには私自身の私にとっての他（者）性）、こうしたものがあまったものとしての他性が、そうした踏み出しにおいて垂直軸と水平軸の間の様々な問題、齟齬をうみ、それが過ちの運動性となりまた転を形成していく浄過の運動ともなるわけだが、こうした過ちの動性が瑣末な面においてでなく、生の全局面においてまた、死等のまさに我々の生に対する真剣さに関わる局面の問題性そのものを形成し、価値の生成にもかかわるといふこと、これが本章で追及してきたところのことである。限定性と全体性、その両項関係において左項は拮抗的結合において右項をきりひらく力を持っているという以上に、左項への根本的かわりと両項連関なしに右項はあり得ない。上に簡単に限定性と他性との関係と区別を整理したが、そうした他性こそが、そこからの動性を形作り、過ちと転の運動性となっていくのであり、その意味で他性を力動性として見る見方が可能になる。——それでも「他性の力動性」という言い方はまだやや先走ったものである。その正当性と意味は（次の破碎の話とともに）他性の運動と私の運動との相即を明確にすることでもってより明らかにされる。

注記の三つ目として、統持の対成立で論じた、統持の蒸発性を、全体連関の中で、破碎という観点で見直すことの提起しておく。これは、鏡玉性という言い方にあわせたある種の比喩的表現（つまり鏡の破碎）と言えなくもないが、言い方の変更はそれなりの内実的意味を持っている。蒸発は小文字的性格によるものではあるが、これは、世界の中の小文字的な諸々のもの、その重みと重ね合わされ、さらに、統持の中心性として示されたこと、つまり統持があり得るといふことが小文字的な諸々のものの重みを支えているということと、連動させて考えられねば

ならない。統持が蒸発すると言っても、そのようなものであるからこそ、もっと言えば、そのような小文字的なものであるがゆえに、世界の諸々の小文字的なものの重みもある。第24節で論じたようにこの蒸発がある程度実的に感得されねばならず、第28節で論じたように統持のあり方と世界の諸々のものごと、価値との関係が単にあるだけでなくその感得自体が要請される限りにおいて、先鋭化された統持の経験においては統持の対成立的蒸発的性格とものの重みとの関係も焦点にならねばならない。つまり統持に含まれる蒸発的動性は諸々のものの重みへと連なる実的動線を形成することになる。この実線性からすると、蒸発という表現以上にこの段階では破碎という表現にふさわしさがある。やや比喩的ではあるものの、次の言い方が理論的有効性持ったものとなる。鏡がわかれてもその鏡としての輝き、働きが世界に満ちる。(統持があり得るといふことの必要性からすれば)世界が美しいのはどこかに星のかけらをかきつけているからである。 - - いま、星のかけらという比喩的表現を再び用いたが、これも理論的有効性の強いものであると主張したい。統持自体が貴重なものであっても内に破碎をもともとはらんでおりあくまでも一つのものにすぎず、かけらのようなものである。ここでかけらであるということはもちろん、まずその動性の相において言われているが、同時にこのかけらはあくまでも一個のもの、他のものと並ぶ一個のものであり、その意味でそれは実的に互的かけらである。 - - 統持はあくまでも小文字的なものとしてとらえられねばならず、小文字的なものとの関係で、その場においてとらえられねばならない。統持が他のものの輝きを条件づけるにせよ、逆に言えばそのような関係を前提として統持は統持でもある。その意味では統持はもろもろの小文字的なものの力を前提として、つまり、言わば、鏡がわかれてもかけて飛び散ったかけらが鏡となり得るといふ可能性、可能性ではあっても十全な実的可能性を前提としてはじめて統持である。これをまとめて二つの面から統持に関して

整理すると、まず、統持は、鏡玉的卓抜性をもっている、同時にあくまでも徹底的に one of them 的なものとしてとらえられなければならない、そのことのうちにのみ鏡玉性も成り立つ。統持があり得るということが重要でも、ある意味統持などなくてもいいのだということ、これが統持を支えている。そして一方で統持はもともとそのうちに破裂性をかかえている。それは運動性ではあっても実的なものであり、事実的感得が要請され、その実線的運動性が全体性へともつらなるものとして統持のうちの中核的な重みを持つ。統持が事実的に傷ついた相のもとにあるという意味では、統持とは、言わば失恋後の出会いのようなものである。

三つの注記をすませてから、拮抗的 asyndeton 的結合運動性と様々な転の諸項目との間の総合的連関を示すという、予告しておいた手順の従って、諸項目の間の有機的運動構造の解明にうつる。まず、鷗外型のおそれと逆転認知の合体をとり上げ、その上でさらにもう一つの重要な接続点の解明を行う。

鷗外型のおそれが統持という実的なものとの関係によって、知識論的な「かもしれない懷疑」と類縁性を持つ抽象性を脱し、肉付けを得ることは、統持の生成と根づきの論述のところで主張されている。その後の論述において、統持に理念性が付きまとうことの問題点が小 - 大 - 小運動により「払拭」され、かつ、鷗外型のおそれの限界性の持つ射程が世界全体的なものとして、生の諸局面、価値の生成にかかわるものとしてその拡充が明晰化され、このおそれの限界性の問題性が明確に先鋭化された。これは少しの進展にすぎないようにも見える。しかしこの明確化はかなり重要な重みを持っている。ものと全体性との極端な対置と asyndeton 性がはっきりさせられたとき、運動性の相における限界性の感得と全体性とのかわりが際立ち、この限界感が小文字的な次元のもの性の肉付けを明確に与えられて力を持たされることになり、この限界性への運動性が転においてかなり基軸的なものとなるからである。鷗外

一  
二  
二

型のおそれは、全局面化された形で生そのものへの私の見方、関わり方そのものが、限定的なものであることを問題化するものとなった上で、具体的肉付けをもったかたちでの左項への運動となる。まさに限定性の先鋭化された運動こそが全体をきりひらく。見方そのものが、それへの運動性そのものが限定性をもっていることの、限定性、他性での小文字性の力による先鋭化をもった全局的な感得はきわめて重要になる。この全体性の開示は、つよくそして多重的に限定性、他性にいどられる。見方、関わり方の限定がまさに小文字的なもの場で問題になるという他性のうちでの感得、開示、そしてそのように限定されることのうちのみ開示があるということ自体の他性、さらにこうした運動性そのものもつ限定性と、それに伴う他性、こうした他性が徹底して働くことにおける開示である。かくして、限界性を問題とする鷗外型は、あくまでもこのように変様させられた上ではあるが、この段階では、全体性の開示、転においてきわめて基軸的なものとなる。いま他性に関して、私の運動性自体の他性と記したことについて述べておくと、すぐ後で、運動性におけるものの運動性と私の運動性との相即としての、他性の力動性についてほりさげるが、それを明らかにすることにより、運動の徹底した、限定性、他性はより意義づけられることになる。

一  
一  
一  
逆転認知についてはこれまでの事情を整理することで十分である。対峙の両項と関係の先鋭化が逆転認知の合体の先鋭化であることは当然のことである。強調しておくべきことは、asyndeton 性として考察したことが、逆転の重みを際立てることであろう。小文字的次元の小文字性の先鋭化は、そこにおこることの鋭さを「まったなし」のものとしてつきつける。こうしたあくまでも水平面上の水平面的事象としての逆転現象が、もっと言えばそのようなものがまさにそのようなものそのものとしてあることが、垂直軸の深みを開示するものとなる。その意味では逆転と認知の結合自体が asyndeton 的のものとして明確化されるわけである。



逆に言えば、こうした asyndeton 性の感得により限界と全体性との関係が先鋭化するものであり、かくして逆転認知はこれまでに考察した諸項と有機的運動を形成する。

予告に従ってもう一つの重要な接続点の解明にうつる。それは、運動性と他性との連関、とりわけ、私の感得、思考のそれとしての運動性と、他性のもつ力動性、そしてさらには、統持と世界全体性とのかかわりとの、連関である。まず連関をひととおりに描きそのうえでそれを強化する重要項目を追加する。

統持形成論において、ものにむかう私の営為、感得、思考、特にその能動性が強調されたにもかかわらず、その後の論述展開においてそれにあまり言及してこなかった。これは論述の都合にもよるが、それだけにこの要因はここで重要な役割を演じることになる。そうした私の運動性がより広い射程をもつことで転の安定性の核となること、それが他性の力動性と一体的であることが示されていかねばならない。

形成論で論じたようにその際の私の運動は感得的でありかつ思想的なものであり、まさにものに限定的に向かうことでありながらかつ生全体を思うことであり、そして能動性を基軸としながらも、能動性と受動性、肯定性と否定性がそれぞれ混交し、かつそれらの混交自体が運動しまた混交するものであった。運動はこれら諸要因の混交の中で起こるものではあるが、同時にまた私の（能動性を基軸とする）運動であり、それらの要因と諸関係をひきおこす、ないしは顕在化、先鋭化、活性化するものである。それによって統持の結成がそして結晶化と蒸発の対成立的状况がうまれてくる。統持自体の運動を本節において破碎的運動性として描いたが、（当然のことながら）その運動性は私の運動性とともなかり、それをひきおこしながらそれによってひきおこされる、ないしは顕在化させられるものである。ものにあるのはもちろんあくまでも下地でしかない。それが運動性となるためには私の運動性を、それとの連

動を要請する。第27～31節において統持の拡散、さらには世界の諸々の小文字的なものごとの小文字性とそれとの連動が論じられたこの段階では、私の運動性も統持の運動性とのおい述べたような運動性も当然のことながら拡張させられねばならない、いやむしろ拡張させられている。とすればここには統持、私の双方の、そして両者の間の、世界全体の諸々の小文字的なものへの、生全体と価値の生成場全体をまきこんだ運動性があることになるし、全体性に付随する抽象性への誘導についても小・大・小運動においてその払拭への方向付けの基盤が与えられることになる。世界は、そして統持と世界との関係は私をそこへ差し向け、また私の能動性、感得的かつ思想的動性は、そうした全体性をそれとしてあらしめていく。この運動性はものに向かい具体的に生きる運動性である。――ここで、この運動のあり方において注意しておくべき重要なことがある。私自身の運動がより展開すると言っても、まず統持を形成する運動があつて、そこから発して世界へと拡大するというのではない。むしろ、統持の世界性運動によって本節で問題になっている拮抗的結合の両項と関係は先鋭化するわけである。私は統持（形成）の世界運動性を感じながら、それによりそわせて限定性の運動性を強め、能動性により世界運動性にそつた感得の調整を鋭くし、ものの他性の顕現である拮抗的結合の運動性を感じ、また統合の拮抗性自体に他性の強い顕現を感じながら、その運動と、能動性と受動性との混交、および両者の先鋭化をおこすことによって、それらをそれらとしてあらしめる運動を起こす。こうして私はものの他性の発する運動に身をあわせつつかつその他性の運動自体の一翼を担っていく。かくして他性の運動性は私をまきこんだ力動的なものとして成立することになる。そしてこのような徹底化に基づいてはじめて私は世界の様々な物事を感じ得る。このことは統持への限定的な入り込みと同時にそれと相即してなされることになるわけである。

統持の運動性と私の具体的な感得的思考の運動性の連接、相即性は特に、肯定性の安定性にとって重要であるが、それは、統持の運動性が、私の感得的運動と相即するものとして確固とした実態性の裏付けを得て、具体的で現実的なものとして感得されることになるからである。特に思考運動が思考のそれとして理念性の払拭にそれなりの困難さをもっていることを考えると、この「払拭」の意味は大きい。そして、前節の最後に言及した三つの現象的要因と相まうことによって、肯定性の安定性のための基盤を提供することになるであろう。私は他性の力動的運動性自体を生きる者として自己を了解し、それをある程度の一定の気分的同質性において感得する。運動は世界の、生の全域をおおうものである以上、私は世界のすべての事象において動性の相即性の意義を感得する機縁を与えられることになる。私は生の全体の外には逃れられない。その全体が常に問題になり、諸局面がその具体相において感得されることが要請されることにおいて、常に私は転の運動へと差し向けられる。

さらに、この運動の相即の現象的実態性とその感得を強める重要な要因がある。それは、他性と私の運動性との連動、そして、他性が、時間的展開性を指示するということである。

他性と運動性の時間的展開相とのかかわりは様々な局面から指示されている。 - まず他性は一挙に開示されない。このこと自体が我々に与えられている接近の道が時間的展開性以外にないことを示唆している。これをもっと現象的に追求、考察すると、ものの具体的なあり方に行き当たる。ものとの関係、ものが小文字的なものであることが他性のゆえんである。もともとものは多様な相貌を順次表してくる。抽象化されたものでなければ一挙に並べて見渡せられない<sup>(4)</sup>。さらに、もの（個）と全体性の接合の asyndeton 性が（ある意味逆説的に）この接合がむしろ時間的であることをものがたっている。無媒介であると言っても左辺自体における右辺の直接的な感得は要請である。この無媒介性は「強

引」なのであり、単純に一拳に感得できるような類のものではない。この強引さ自体が世界内的な実体として時間的展開を要請する他性の力である。さらにまた、統持の世界への拡散は私が生の様々な事象に向き合うことを要求している。その中にこそ統持の輝きがあり他性の根源的あらわれがある。様々な事象に向き合うことは時間的にしかなされない。

個的なものと全体性の接合の拮抗性がいかに鋭利でも、その実動の実態は日常性における展開性をもつ時間軸上のひろがりとしてある。（この時間的相続的展開性の内実、とりわけその日常性の面においては第七章以降での考察が必要であるが、とりあえずこの段階では、思考的感得、感得的思考、感得の諸調整をもつものの場において限定性に向かい生きることとして整理しておこう。）他性のこの指示において、統持、他性の運動性と、私の運動性の相即性は、世界内的に時間的に展開されるものとしての確固とした具体的実体性を獲得する。そして具体的現実的な時間の場に生きること自体が他性の指示、他性の運動性の顕現としての位置を獲得し、私はそのような全体的運動性、力動性を生きていることを感得し、またその感得の資格を獲得する。

私は自分の運動性自体を、ものの他性の力、もろもろの小文字的なものの力の、発動性として、発声として実感する。運動性がもの的身体性の相で感得されるとも、自分の身体自体が他力動性の相で感得されるとも言い得るであろう。それだけではない。先に鷗外型を扱ったところで論じたように、運動性自体が限定されている。限定性に向かう運動自体が限定性の相にあり、そのことがまた（と言っても前と別のことではない）時間的展開性の要請という形で発動する。そしてこうした限定性がもの（向かわれる左項）のもの性に結実しているものとして所与的にあり、そのように感得される。かくして私の運動性はもの限定性を執拗に与えられる形で、肉づけの相、具体的相続的実体性の相において他性の力動性として展開されることになる。

こうした考察により、他性の運動性が確固とした具体的実在性の保証を獲得し、また私の運動性、能動性をまきこむ力動性が描かれ、また私の運動性に、生、世界の全局面性が得られると同時に、他性自体の運動相が獲得されることによって、肯定性の安定性への礎が築かれた。他性の力は、ものものとしての力であり、それは過ちの運動性の諸局面と転への動向をひらくものとして本章が描き続けてきたものである。それは、小文字の小文字としての力であり、拮抗的接合の *asyndeton* な鋭さであり、諸々の小文字的なものの声であり、私の運動、行をまきこんだ総合的力動的運動性を作るものである。 - - 本節でこうした構造連関が浮かび上がったのが、統持形成論の後の第 27 ~ 31 節の成果にもとづいてのものであることを、もう一度確認しておこう。次節で構造連関の全体像の概観を整理し直してから、運動性の接続性の支えとなるもう一つの（注記的）項目を付け加え、肯定性の安定性について整理してから、まとめとしたい。

その前に（整理等の前ではやや内容的に先走りになるが）他性とそれからついでに「星のかけら」という言い方について、話の視界をよくするために、少しだけ注記的説明ないしは整理を付け加えておきたい。他というものが何かあって、それが力を持って私を動かすというのではない。むしろ他とは、現実的相統的運動<sup>(5)</sup> においてのみあり、言わばそれをはらむ場へとおのれを無化するような無的運動である。ちなみに言えば、統持が星のかけらであるという言い方についても、これも破碎運動の動性を言い表すものである。かけらのもととなる星本体のようなものがあるわけではない。統持自体が無的運動である。ややレトリカルに言えば、統持は無るのであって、統持は無いのだ。

### 36 とりまとめ第三段階 全体性、他性、所有

実質的な考察は前節まででそろった。ここで必要なのはまとめ直し

と若干の注記的追加である。

前節で転、浄過の運動性の中核、考察の言わば到達点としてうかびあがったことの重要点は次のように整理されよう。一つには、個別的、限定的なもの全体性との拮抗的接合がある。そこにおいて鷗外型のおそれが先鋭化、一般化されたかたちにおいてきわめて重要な役割を演じる。もう一つには、その接合において個別的なものがあくまでも一つのそのものとして重要であることがある。瓦であることそのことにおいて全体を映すことが成立する、つまり瓦であるがままの鏡玉である。第三としては接合の左項が、小文字的で破砕性をひめた one of them 的なものにすぎない、そのようなものであるからこそ重要性をもつということ。いわば「統持などなくてもよい」のであり、その一方で統持のようなものがあり得るということが決定的に重要になる。これは他性の力があるもろもろの小文字的なものの声としてあるということでもある。第四は、ものの運動性と私の運動との相即性であり、他性の運動が私の運動、時間的展開性における行であるということである。 - - この四項目が運動する。その運動性は様々な角度から描ける。例えば前節でとりあげた「星のかけら」という言い方は、第三で示した形で現象的に感得されるものの重要性を示したうえで、それと第四点の運動が、第一、二点の内実ともなっていることを表している。運動のその他の記述可能性については実質的に前節までの内容の繰り返し以上にはならないので詳述は省略し、ただ簡単なかたちでだけ全体を総括しておこう。 - - もののものとしての重要性が、ものがものにすぎないがゆえに全体を映す力となるが、それがまた asyndeton 的接合の拮抗性の力としての他性であり、それが運動性を形作り、しかも私の運動を伴って、かつ私の運動としてはじめてあるような動性をかたちづくっていく。他性とはこのような力動性である<sup>(6)</sup>。

さて、前節からの考察での「全体性」の扱いに疑念がもたれたかもし

れない。前節でも全体性と全局面性は明確に区別されており<sup>(7)</sup>、本論がそれを混同するような愚をおかしていないにせよ、全体性ということでも最も問題になるようなこととして通常考えられそうなこと、そのおおよそを言えば、人生のそもそも何たるか、自分は何を欲しているのか、私はどう生きるべきかの、全真実、死や様々な限界性を受け止めきること、「これこそが人生だ」と言えるもの、自分の人生全体に対して向き合いきること、こういったようなことが、扱いきれていないではないか、という疑念がもたれたかもしれない（これはまさに鷗外型のおそれで問題になるような全体性ではなかろうか）。しかし、本章の主張は、そのようなものの一挙の開示、達成などあり得ないということであり、そうした形で本章はまさにそのような意味での全体性を扱ったのである。他性は運動的展開性を指示する。ものは様々なありさまをその都度示してきて、垂直性と水平性との諸関係をうむ。現象面で言えば、他性は、時間的運動性を指示する、あるいは時間的運動性、展開性こそが他性の顕現である。全体性とは、上の疑念が問題にしたようなものと、全局面性をつなぐ動線のようなものとしてしかあり得ない<sup>(8)</sup>。全体性とは他性全体性である。疑念に対するこうした答え方は、場合によってはアクロバティックなレトリックと映るかもしれないが、実際には本章からの帰結以外のなにものでもない。 - - 以上、この段落に与えたことは「注記」と言える内容であるが、他性力動性の理解にとってはそれなりの重要性を持っているように思える。他性は、上に述べた動線の接続運動性において、全体性の内容をかたちづくっていくわけである。

全体性といったものも、真剣さといったものも、つねに他性にいろどられており、とらえきれなさ、力のそがれなどと一体のものとしてある。しかしだからこそその全体性であり、真剣さである。生の実感結局、限定性、巡回性、揺らぎの相においてしかあり得ない。そこにおいてこれこそが生だということが感得され、そこにおいて全体がある。しかし

そこでは、これこそが生だという感得が同時に限定され揺らいでいる。だから全体が問題になり主題化されるということは、全体がそれとして把握され感得されるということでありながら、また、つかみきれなさの相におけるつかまれである。ある意味では誰でもが分かっている、ないしはうすうすと感じているはずのこうしたことが重みを持つ。ものの力、他性の力は、それに対する否定性とともによりながら、そのことをも覆い隠してしまう作用を持つが、哲学はその点では世界に対する介入である（こうした介入性については、本章の中でもまたその他でもときおりとりあげられてきた）。本章が要求している全体性、真剣さについての見方の変更は、微妙な変更であるが重要なものである、いや、重要なものだが微妙なものであると言った方がふさわしいかもしれない。ものの力、小文字的なもろもろのものの力は、強くとも、大文字性への希求の力もそこに根づくだけに、そうした動向の中で声は耳をすませないと聞こえてこないようなざわめきようになってしまうこともある。だからこそ本章が、死やその他の様々な決定的な限界性といった重大問題の中核をなす過ちの問題を説き起こすにあたって、針小棒大な論を展開していると思われかねないような局面からはなしを始める必要があったわけである。そして、小 - 大 - 小運動を引き起こしているのもそうした小文字的なものの力である。本章は、世界の中のさまざまな小文字的なものの輝き、声を感じ得ることを、世界が輝いているのが、世界がどこかに星のかけらをかくしているからであると感得することを、要求する。

全体性が「限定されたもの」であるように、転の肯定性の安定性も限定されたものでしかない。わざわざことわるまでもなく、そして説明をいまさらくりかえすまでもなく、我々がものの偶然性、出会い、適合の偶然性に委ねられることはその根本においてはどこまでいってもかわりはない。それを否定することは本章の論の全否定になりかねない。偶然性、他性の力こそが過ち、浄過の根本である。もちろん否定性の力自体



が、肯定性への転化の原動力となり得るのであり、それこそが本章で考察したことなのだが、しかしこの「なり得る」も偶然性に支配されている。前節で析出したのは、この転化の機縁の一定の安定性である。他性の運動が私の時間的運動性として感得され、それが全局面性をもつことにおいて、こうしたこと自体の理解とあわせて、機縁の安定性が得られる。これはひらたく言えば、「とっかかりとなる声を聞き取る機会を安定的に与えられる」ということ以上ではない。そしてあくまでも否定性の力が肯定性に転化するものである以上、常に幻性はつきまとう（この夢幻性は気分の肯定性以外の諸局面についても同様である）。そしてこの夢幻性は我々の根本体制、そして生の劇性、夢中説夢性を指示するものだが、それでも実的な夢幻性である。安定性に関しては、私が理解するに、以上が論としてなし得る最大限のものである。

最後に、第32節の終わりでふれた「所有」についてふれておく。これは論点ではなく、この段階ではあくまでも総括の言葉でしかない。受動性、限定性、もの性という三項目を言い表すだけの言葉であり、ものと他性という本章の主題をくくる表示でしかない。あえてこの言葉を使用する最大のポイントは、「有」の字を介して、第五章の有時の論を第七章で発展させ直すことと、本章の内容とのつなぎを主題化するための効用性である。とりわけ所有に含まれている三つの意味のうちの、個々のものとの関係という点を重視したい。所有は限定性、所相性が、ものの力の反映として作動することにおいて転をかたち作っていくあり方、そこに生き、有る有を示す。小文字的なものの力こそが本章の主役であり、そして、ものの力を徹底的に先鋭化させたかたちでとらえ、また、先鋭化させることにおいて、本章の論は言わば「唯物論的」である。まずものがある。根づきがあるとは、まずものがあり、まず統持があるということであって逆ではない。「輝く星々と大地、それ以外にいったいなにがあるか」という問いかけ、これこそが唯物論的思考が遂行する

ものである。 - - 本連載においてそうしたことが重要性をもつということは、わざわざことわるまでもないことかもしれない。それは、当然、有時の考察においてもその様々な点においてこれから重要性を持つてくるであろうが、一点だけ特に重要なポイントを予告的に述べておく。第五章の最後に、有時の三肢構造の第一格と第二格の間で、ものごととの関係がねじれたように交叉するキアスムの構造があることに言及した。その段階ではそれは提起にとどまったが、本章の考察で「唯物論」が提起されたことにおいてそれを考え直すための下地が作られたことになる。キアスムの考察はこれからの有論、有時の三格構造についての論において重要な位置を占めることになるであろう。「所有」はそのような有論への展望であり、この段階では符号にすぎないながら、それを論点として形成していくことの予告である。

最後の最後にひとことだけ。本章の帰結として最も重要なこと、本章の last word は何かと問われるならば、そのようなものはないと答えよう。あえてあげるならば、いま述べたこと自体である<sup>(9)</sup>。

## 注

本章において『饗宴』等のプラトン著作を扱うさいの原典は J. Burnet *Platonis Opera Omnia* Oxford Classical Texts 1899-1906により、引用するさいは、岩波版『プラトン全集』の訳を使用し、解釈の異なる場合は注等で明記した。(本連載はあくまでも『饗宴』をふまえての哲学研究、考察を企図したものだが、同時にプラトンを基盤としたものであるので、確認し直しておく。)

- 1 ハイデガー『存在と時間』、ジャンケレヴィチ『死』、グイエ『演劇と存在』は代表的例だが、例えば、サルトルの『存在と無』のハイデガーの死論の批判が哲学の常識的見地への異議申し立てのトーンを色濃く持っていることも明らかに思える。(松浪訳『存在と無(下)』983-1010)。
- 2 最終的、事実的な死は、もはや(当人のものとしては)経験とは言えな

い。

- 3 いま言及した経験（『リア王』4・1・25-26参照）は、小・大-小運動とも同種性をもつと言えよう。
- 4 愛のようなケースにおいても、相手である人間を全体として見る等ということが必ずしも（データの的に見て）出来ていない（cf. R. de Sousa *Love A Very Short Introduction* 2015 P.65）。なお、いま掲げた de Sousa の本は哲学の愛の研究では現在の主流派からはずれたものだが、そのために、短いものであるにもかかわらず学界にとっての意味のある本になっていると言える。R. Solomon et al. ed. *The Philosophy of Erotic Love* 1991 のような論集があるものの、de Sousa、Solomon などの研究は今日では非主流派扱いと言える（主流派の源流として扱われているのは、Velleman, J. D., 1999, “Love as a Moral Emotion” ,*Ethics*, 109:338-74、Badhwar, N. K., 2003, “Love” , in H. LaFollette (ed.), *Practical Ethics*, Oxford University Press, 42-69. などである）。しかし、それらの研究は、情動の哲学との関連付け、心理学との連動等の点で今日の主流派が参照すべきところが大きいものである。
- 5 「現実的相続的」「相続的時間的」といった言い方は本当のところは（やや）形容矛盾的である。現実時間に時間間的活動が文字通りにあいついで起こることはあり得ない。これについての本格的考察は第七章以降の課題となる。
- 6 実は私はここで冒頭に掲げた『詩学』の「行為の再現とは筋のことである」（アリストテレス『詩学』第六章 1450a）との対応も考えている。
- 7 全体性が全局面へと展開されるという記述は全体性と全局面性との区別を前提している。
- 8 生の一貫性というものも常に変転にさらされることを第五章第6節で論じた（連載その十六）。近年の倫理学などではこうした一貫性的同一性の困難さについての目くばせが欠けているように見える。こうした批判的見地に親近性をもつ指摘としては、cf. J. Kekes *How Should We Live?* 2014 35-56（Kekes の論は直接的には主に C. Korsgaard (*Sources of Normativity*1996 など）に対して向けられたものである。なお、これ関連する問題として、性格、徳の安定性に関する、徳倫理学に対する状況心理学の知見を用いた反論がある。これについては、公平に言って、現在段階のところ、安定性の存在を主張する徳倫理学側の旗色がかんばしいとは言えない（e.g. C. Miller *Character and Moral Psychology* 2014 esp.85-152）。
- 9 第六章は連載の「悲劇論」の骨格をなすものではあるが、悲劇的なもの

の主題化はこれで終わるわけではない。(ちなみに、余談になるが、『リア王』は nothing を patience とともにキーワードにして展開されているが、第七章では patience がきわめて重要な役割を演じることになる。もう一つ付け加えると、第七章のタイトルは「門」である。)